パネルディスカッション

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う自粛要請が与えた弊害とその対応策 ― ICTを活用した地域高齢者に対する運動指導と自己管理 ―

平野　康之　（東都大学幕張ヒューマンケア学部 教授）

【要旨】

新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言発令以降、外出の自粛要請をはじめとする多くの対策がなされた。その結果、地域・在宅で生活する高齢者や要介護者は医療機関への通院休止、通所・訪問サービスの利用休止などにより医療・介護従事者との関りならびにサービスそのものが制限され、身体機能の低下のみならずQOLの低下をも来す者が認められた。緊急事態宣言の解除以降は、地域の通いの場や医療・介護サービスが徐々に再開され、感染予防の徹底を図るとともに、新しい日常生活様式を踏まえた指導・支援方法を模索しながらそれぞれの活動・サービス提供が行われている。

これまでの医療・介護における患者（利用者）の指導・支援は主に“対面”で行うことが優先されてきた。これは、高齢者のIT（Information Technology）活用に対する抵抗感や理解不足などを理由に、医療・介護現場がICT（Information and Communication Technology）の活用を積極的に進めてこなかったことが根底にある。その結果、今回のような“対面”が困難な状況下において、“非対面”での指導・支援方法が構築されていない脆弱な体制が浮き彫りとなった。よって、これからは地域・在宅での身体機能維持・改善や疾病管理、フレイル進展予防などに取り組むための“非対面”での指導・支援方法の構築が急務であり、ICTの活用や自宅訪問などを組み合わせたハイブリットな指導・支援体制の強化などが求められる。

本セッションでは、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う自粛要請が与えた弊害について概説し、その対応策としてICT の活用などを踏まえた運動指導や自己管理方法について紹介する。

【プロフィール】

平野　康之（東都大学幕張ヒューマンケア学部　教授）

1998年、高知リハビリテーション学院理学療法学科を卒業した後、聖マリアンナ医科大学病院に入職。心臓リハビリテーションなどの急性期リハビリテーションに従事した後、地域・在宅での理学療法に興味を持ち、訪問リハビリテーション業務に携わる。2010年より徳島文理大学保健福祉学部理学療法学科に赴任し、学生教育に携わるとともに、訪問リハビリテーション研究会を立ち上げ、訪問リハビリテーションの質向上、エビデンスの蓄積に努める。2019年より、現在の東都大学幕張ヒューマンケア学部理学療法学科に赴任。専門は地域における内部障害理学療法、リスク管理、フィジカルアセスメント。